

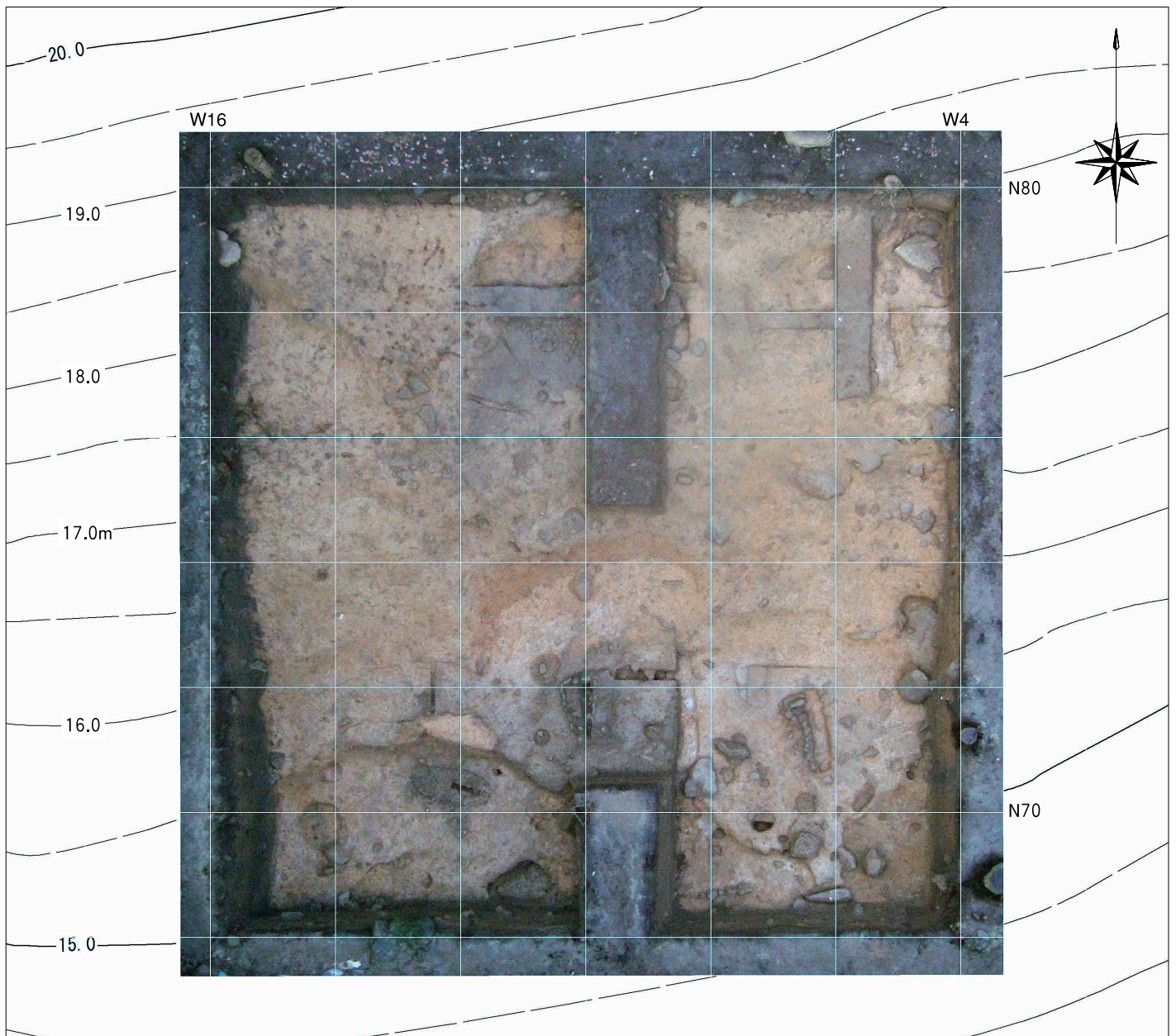
2. 出土した遺物

縄文時代中期末～晩期中葉に及ぶ遺物（整理箱28箱）が出土した。I区で9,600点を数えた出土土器片の大半（92.6%）は後期の遺構が集中する調査区南半分からの出土であり、斜面崩落土（多量の破碎礫を含む無遺物の堆積層）より下位で出土した。土器形式は、最古の中期後葉の大木9式期に始まり、数的に微量の堀ノ内1式期を経て、堀ノ内2式土器併行期（東北北部土器型式適用の場合、十腰内I式併行。または中・南東北の南境式期）に再び集落の営みが開始されている。主体性を成す時期は後期中葉～後葉（宝ヶ峯・加曾利B式～瘤付土器）であり、これは、検出された時期別の住居の割合に整合している。特色ある遺物としては、有脚石皿や雁股状の異形石器、打製石器の約4割（26点）を占める石鏃、完形の後期中葉（宝ヶ峯・加曾利B式）の深鉢等が出土している。有孔垂飾品も異色である。剥片素材石器は25点、磨製石斧6点を数えたが、過年度の斜面調査区に比較して、石器の出土量は少ない。

今次の調査により、北東の台地上に営まれた中期中葉の柴燈林遺跡から中期末葉を経て後期後葉に至る長期の集落立地の変遷を具体的な住居遺構を基に論じることが可能となった。

3. 課題

出土した後期遺構群で、配石遺構を含め、後期に墓域を形成した可能性がある。後期居住域として利用された後に墓域としての2次的利用を考慮する必要がある。近年の調査で傾斜面における集落本拠地変遷の解明が前進したことで、低地部と居住域の年代別にした集落内の遺構等の対応関係の証明が急務となっている。また、考古学的な課題の他、縄文集落を覆う崩落土直下層の¹⁴C年代が $1,100 \pm 30 \text{yrBP}$ を示したが、古代における自然災害との学際的研究が不可欠であることを示している。



▲40 第I調査区空撮(S:1/100)

Yuza Town Archaeological Records No. 9



▲2 斜面の竪穴住居ST6 (←南西)



▲3 配石遺構SM1半截



▲4 石鏃

- ▶ 1 第I調査区の出土遺構 (←北東)
※人物の立位置が竪穴住居跡

報告書抄録

ふりがな	こやまざきいせきだいじゅうろくじはつつちょうさほうこくしょ						
書名	小山崎遺跡第16次発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	遊佐町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第9集						
編集者名	佐藤禎宏 大川貴弘						
編集機関	山形県遊佐町教育委員会						
所在地	〒999-8301 山形県飽海郡遊佐町遊佐字舞鶴211番地						
発行年月日	2010年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小山崎遺跡	遊佐町吹浦 あざなまがひ 字七曲・柴 燈林 他	461	2214	39°04'18"	139°53'26"	20090803 } 20101211	156.0	重要遺跡確認 のための行政 目的の発掘調 査

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落跡	縄文時代	中期末葉～後期後葉の 竪穴住居跡4軒 住居跡可能性遺構5軒 後期配石遺構1基	縄文土器 (中期末葉～晩期中葉) 土製品 石器・石製品	縄文時代後期における 斜面地を造成して形成 された集落跡
要約	低湿地部にほど近い傾斜面に造成された集落本拠地の様相解明が進展した。周辺一帯での居住域について、中期中葉の柴燈林遺跡から始まる斜面への集落進出が中期末葉に本格化し、続く後期の大規模な斜面削平による居住域造成の姿が解明された。				

小山崎遺跡 発行 平成22年3月31日 遊佐町教育委員会生涯学習係 山形県飽海郡遊佐町遊佐字舞鶴211 0234-72-5892
第16次発掘調査報告書 印刷 株式会社 小松写真印刷

March 2010

Yuza-machi the Board of Education, Yamagata Prefecture, Japan